

日本語教育における能力と自己評価の意味

—越境する中国朝鮮族日本語学習者の言語意識から—

The meaning of abilities and self-evaluation in Japanese language education: Language awareness of a boundary-crossing Japanese language learner from the Korean minority in China

鄭 京姫 (早稲田大学)

CHUNG, kyunghee (WASEDA University)

1. 研究目的

人は自分が持っている言語をどのように捉えるかによって自分の評価基準を上げると考えられる。それは理想とする自己を思い浮かべ、こうありたい自己像を確立していくことであり、日本語を通じた「能力」への可能性の発見でもあろう。しかし、多くの言語能力を持っているにもかかわらず、そのどれも自分のものではないと感じている日本語学習者がいる。

本研究では、越境と移動の時代を生きる個人の言語使用の意味、日本語教育において、言語能力と自己評価を考える必要性とその可能性を試みた。特に、「越境」を手がかりに、中国朝鮮族として生育し、日本と韓国を越境する二人の日本語学習者の言語意識をライフストーリーインタビュー調査により、言語意識と言語運用能力、さらにそこで見られた自己評価と能力の関係を明らかにした。

2. 研究背景

単一言語・単一社会であった日本は移動と越境の時代であるとい

っても過言ではない。今日、移動の経験をする子どもや片親が日本人のハイブリット家庭で育つ子ども、または親の日本定住によりニューカマーとなった子どもなど多様な言語背景をもつ子どもとその家族が日本の社会で生きている。したがって、多様な言語背景を持つ子どもたちへの言語教育とその支援を考えざるを得ない。

このような時代背景と伴い、近年、日本語教育においても複言語・複文化主義への議論が行われている(細川,西山編 2010 他)。

CEFR(Common European Framework of Reference for Language)と呼ばれる複言語・複文化主義は主にヨーロッパの文脈で語られている。そこでは、一人の人間が複数の言語を使えるようになることを目標とし、その言語の到達目標や能力を国と言語を超え、共通の尺度で見えていくことができるようにしたいと述べられている(Council of Europe,2001)。しかし、このような複言語・複文化主義がもはやヨーロッパの問題ではなく、日本語教育においても重要な課題になってきている。本研究で取り上げるように「中国朝鮮族」として括られている日本語学習者も複数の言語環境で生育した人であり(鄭 2011)、また移動と越境の時代と言われる現代において日本語を学ぶ学習者の中にはすでに複数の言語を持っている学習者が多くいることに日本語教育が目をつける必要性を物語ってもいえると言えらるからだ。

だがCEFRは、ある言語について学習者がいつどのような学習をし、どのようなレベルにあるかを記録していくことによって、学習者が生涯にわたってさまざまな場所で言語の学習を続けていくことを助ける教育ツールの一つとして言語意識教育を考案したため、そこでは個人の言語能力は重視されているは言えない。何より、ヨ

ヨーロッパの文脈でのCEFRをそのまま日本の文脈にすり替えることに無理がある。

本研究ではどのように複数の言語環境で生育した中国朝鮮族日本語学習者の語りから、どのように学習を進めてきて、どのように自己評価をし、自らの言語能力に向き合っているかに注目し、インタビュー調査を行った。

3. 本研究の視点

3.1. 中国朝鮮族日本語学習者

本研究は、「中国朝鮮族」という括りで、中国朝鮮族のエスニシティ(カン 1992, 韓 1993)や, 中国朝鮮族のアイデンティティを民族語に対する言語意識を通して考察し(藤井 1993), ましては中国朝鮮族の実態などを描き出したものでもない。「中国朝鮮族」ではあるは、その個人の言語生活、言語意識に注目したものである。

3.2. 言語意識

言語意識は, Halliday によってイギリスで初めて提唱され、それによって言語意識教育の議論が始まったとされている(Hawkins, 1999)。しかし, その言語意識という用語は曖昧な概念であることから, 言語意識学会では「言語に関する明示的な知識、言語学習、言語教育と言語使用の意識的知覚と感受性として定義することができる」(ALA, 2011)と示されているが、本研究では個人が言語をどのように使用し、学習し、認知しているかという「個人の感受性と気づき」を言語意識であると捉え、語りの分析概念も以上の視点に行うこととする。

3.3. 自己評価

榎本(1998)によると、自己への評価において重要な側面を持つ自尊感情(self-esteem)と自己評価(self-evaluation)はほとんど同義で用いられることが多いという。自己に対して記述的な「自己概念」さえもしばしばこれらと区別されず説明されているという。したがって本研究では、榎本に習ってこの二つをはっきりと区別せず、全体的な自己価値(Global self-worth)を含めた自己評価(self-evaluation)として捉え使用することとする。

4. 研究の方法と分析

インタビューは、非構造化インタビューとナラティブインタビューを援用した(桜井 2002, 桜井, 小林 2005)。インタビュー後はテープ起こししたものと内容を語り手に確認してもらい、分析には、IC レコーダーで録音したインタビューを書き起こし記述したもの、及びフィールドノートを使用した。分析方法は、「何を語るのか」ではなく、「いかに語るのか」である(Riessman,1993)ナラティブ分析(Narrative Analysis)を用いた。それによって、語り手が出来事どのように意味づけているかというその意味の発見が可能になるナラティブ分析が適切であると考えた。一連の分析の作業は、まず、「語りの基本特徴である時系列」(Brunner,1990/1999)を重視し、一人ひとりの物語を時間的(「temporal」)順位に即し、出来事を抽出した。そして出来事に対する語り手の評価の側面も重視し、出来事と出来事の因題的(causal)な結びがあったとされる語りを取り出し、「小見出し」をつけ、検討すべきトピックを抽出した。

表 1 インタビュイー

名前(仮名)	ヒヨヌさん	未来さん
性別	男性	女性
年齢	20代前半	20代前半
職業・専門	大学生・日本語学	大学生・日本語学
インタビュー日	2012.8.25/2013.2.12	2012.8.25/2012.8.29 2012.9.25/2013.2.10

なお、職業や専門はインタビュー当時のものである。

5. 考察

ヒヨヌさんは、多くの言語能力を持っているにもかかわらず、そのどれもできないと述べている。特に〈三不通・四不通〉をあげ、自分の言語能力を〈中途半端〉であると説明する。彼の語りからは、自分は何者でもないという価値評価によってアイデンティティクライシスにもつながる姿があった。しかし、自分が持っている言語をどのように捉えるかによって、自分に対して「肯定的な評価」ができ、さらに、「前向き」に考えていく姿も見られた。未来さんの場合は、越境の経験を通じて自身の言語能力への気づきにつながり、肯定的な自己評価を行っていた。中国の〈朝鮮族の村〉で暮らしていたときには、自分は〈ただの朝鮮族〉で、何をしても漢族に負ける。だから努力しなければならない少数民族の一つとしての「朝鮮族」であったのだ。だが、日本語を学び、そして日本に来て、初めて韓国語も中国語も日本語もできることを周りから「すごい」と言

われ、それがどれだけすごいのかはわからないが、自分の言語能力について初めて驚き、自分は「これもできる」、「あれもできる」という思いが芽生えていく。そして、「これもできる」、「あれもできる」という意識は自分がもっと自分らしく生きていられるような気にさせてくれる。未来さんは、それ以来、何でもできそうな気がし、韓国語、日本語、中国語以外にも英語をもさらに勉強し自分を〈プラスアップ〉していきたいと語るのである。

6. 結論

二人のインタビューからは、自分がある言語をどのように意識し、考えるか、または自分の言語能力に対しての気づきによってそれぞれが自分のことばを育んでいくことが重要であることが示唆された。また、本研究で明らかになった言語能力とは、記述、規定された客観的なものではない。自分の言語に対して気づくこと、そして意識していくことで育っていくものであった。その上、そのような意識、自分の言語能力に対する気づきは、肯定的な自己評価につながり、自身の可能性になるのである。自身の可能性とは、自分らしい自分を見つけることであり、それは自己アイデンティティの更新につながる。つまり、アイデンティティに葛藤し、悩む人たちをも取り巻く言語教育につながると考える。つまり、言語能力とは、言語ができるかできないかといった領域を超え、自分の可能性であり人と人をつなぐ能力であったのだ。

言語能力に対する認識は個々の言語意識による。言語意識とは、個人の感受性と気づきのことであり、言語使用には個々の言語意識が反映されていた。したがって、日本語を「外国語」ではなく、「自

分のことば」として機能していく教育が必要である。自分にとって「意味のあることば」の意味を見出し、そしてそれを自分の可能性へつなげていくこと、それがことばの教育において必要である。

そのようなことばの教育は、自分をエンパワーメントしていく力を得ることとなり、自分自身の現実を構築しながら人生を生き、それを自分に対する評価につなげ、自分の評価基準を上げ、ありたい自分を確立していくことにつながると考える。今後の課題として続けて模索していきたい。

参考文献

榎本博明(1998)『「自己の心理学—自分探しへの誘い」サイエンス社

桜井厚(2002)『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

桜井厚,小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房.

鄭京姫(2011)「言語の境界を生きる—「母語」「母国語」「外国語」をめぐる言語意識から」論文誌『リテラシーズ』9,31-40.

カン・ジェシッ(1992)「中国東北地方朝鮮族の民族意識に関する研究(朝鮮語)」『慶熙大学校大学院 高鳳論集』11.

韓(Han)景旭(1995)「中国「内地朝鮮族」のエスニシティー若者三世の事例を中心として」『民族学研究』60(3).

藤井幸之助(1993)「中国朝鮮族の二重言語および民族意識に関する予備調査」徐龍達先生還暦記念委員会(編)『アジア市民と韓朝鮮人』日本評論社.

細川英雄,西山孝行(編)(2010)『複言語・複文化主義とは何か ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』くろしお出版.

Association for Language Awareness(2011).Language Awareness.

(<http://www.lexically.net/ala/la-defined.htm> 2011年9月30日アクセス)

Bruner,J.S.(1990).*Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University

Press.London. (J.ブルーナー (1999) , 岡本真木,仲渡一美,吉村啓子 (訳)『意味の復権』ミネルヴァ書房.)

Council of Europe(2001).*Common Europe Framework of Reference for Language : Learning, Teaching, Assesment*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hawkins,E.W.(1999).Foreign Language Study and Language

Awareness. *Language Awareness*, Vol.8,No3&4,124-142.

Riessman,C.K.(1993).*Narrative analysis*.C.A.:Sage.

付記：本研究は、科学研究費日補助金（若手研究 B）「中国朝鮮族日本語学習者の言語応用能力と言語意識に関する質的研究」（2012-2013 年度、課題番号 24720242）の研究助成により成果の一部である。